

東京日々新聞

四百九十八号

山々亭有人記

田子具足屋

渡辺彫采

萬壽
山々亭
有人記



越後の女子の其情重と共淡く帷子地と共薄れ
 古来より多く娼妓と此國に需むと然るに世移り物
 換て今この狭小の藝妓の真情と以て客の遇
 する者とは世に異なり新瀉港長濱某の雇ひ藝妓なりと
 云ふ者千金と擲つ豪客と厭ひ丁稚より一青年ふ
 意着し盆踊りの夜ふゆき住居馴るる新瀉と跡
 白浪と追て離れと取返し此手拍や
 拍音早往々て名にや不孝の罪の
 親を越えて如賀路のつう過幾
 夜に極み伏見より浪花よるを
 吟行ち座して食ふ山あふで
 固より寒き懐冬と詮方泣
 たり死に未來で遊見を互ひの運の
 天満橋既ふ入水と決じと道往
 人ふ介抱らとちの再度苦海の
 勤め男のやそ人車稼と追
 多し困難と長濱氏不聞け
 車夫との縁と曳ては古郷へ
 帰り錦の帯とちて又や河竹の
 浮一魁とるせりしぞ